ことみアフター

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ことみアフター

【Ｎコード】
Ｎ７８３５Ｍ

【作者名】
ゲキガンガー

【あらすじ】
一ノ瀬ことみのアフターストーリーです。

（前書き）

ことみルートのネタバレ含みます。ご注意ください。

ことみアフター。作ゲキガンガー。

――あのヴァイオリンをことみに渡してから、数日の時が過ぎた。

「――朋也君、朋也君」

眠りかけていた意識の中、ことみの声が聞こえてきた。

「もう、朋也君また居眠りしてたの」

「……ああ。悪い、ことみ」

寝ぼけ眼を摩りながら、俺は目を覚ます。そして欠伸をした。

俺達は図書館にいる。勿論、と言っては何だが今は授業中だ。当然のように図書館には誰もいない。三年のこの時期、多くの生徒は受験勉強で必死になっている。だが、劣等生と天才で立場に違いはあるが、お互いに授業に出る必要がなかった。

「……そんなに私のご本退屈？」

ことみは俺の為に、本の朗読をしていてくれた。児童向けの文学や絵本ならまだしも、ことみが選んだ本は『フェルマーの最終定理』だの『相対性理論』だの、俺にとってはわけのわからない分野だった。

正直こういった類の本の朗読を嬉々として聞くのは、よっぽどの変態だろう。

「……悪いな、ことみ。正直難しすぎる。もっと簡単なのにしてくれないか？」

「朋也君がそういうなら……」と言って持ってきてくれたのは、何の為に高校の図書館に置いてあるのかはわからなかったが、一冊の児童書だった。

「むかし昔、あるところに亀さんと兎さんがいました」

よくある児童書、というよりこれは童話だな。兎と亀の話。最もポピュラーな童話。兎と亀が競争をして、怠けた兎は亀に負けるという話だ。
「二人は競争をする事もなく仲良く暮らしていました」
「……って、ちょっと待て。それはおかしいだろ」
「……どうして？」
「普通は、兎と亀が競争するものだろ」
「子供に対する接し方が従来とは変わってきたの。子供を一個の存在と認め、競争による選別を排除してきたのが最近の教育なの。ゆとり教育などもその流れなの。そういった影響も受けて、児童書も変化をしてきたの。ちなみにうらしま太郎では、亀の苛められるシーンはカット。お爺さんになるシーンもカットされてるの。浜辺で亀を見つけたうらしま太郎は竜宮邸で、末永く幸せに暮らすの」
……もはや重要な部分がそぎ落とされていて何の話かわからない。
それでも、童話というのは耳障りのいいものだ。前よりも自然に、意識が遠ざかっていく。

「――朋也君、朋也君」
再度呼び声。
「もう、朋也君ったら。……仕方ないの」
しばらくして。
ギィィィィィィ。
っという、地獄の底から湧き上がって来るような音が奏でられた。
「――ことみ！」
まどろみから起床までの時間を全くかけない、効果抜群の目覚ましだった。
「あっ。朋也君」
ことみはヴァイオリンを構えていた。
「どういうつもりだ？」
「朋也君がよく眠れるように、子守唄を奏でていたの」

よく眠れるどころか、永遠に目覚める事のない眠りにつきそうな曲だった。
ことみはなぜ眠らないのか、きょとん、とした表情を浮かべる。
思うのだが、この地獄の賛美歌を奏でることみの耳は、恐らくは自分達とは違う音が聞こえるのではないだろうか。
「――ありがとう。おかげでばっちり目が覚めた」
「朋也君おかしいの。子守唄で目を覚ますなんて」
ことみの持っているヴァイオリンは、思い出の深い品だ。一度杏が事故でヴァイオリンを壊してしまったが、直って本当に良かった。このヴァイオリンを見ると、思い出さざるを得ない。ことみの両親、事故に会ってからのスーツケース、そして、俺達のこと。
「……そのヴァイオリン、直って本当によかったな」
「そうなの。直って本当に本当に良かったの。杏ちゃんと、椋ちゃんと、渚ちゃんのおかげなの――。それに――」
ことみは満面の笑みを浮かべた。
「朋也君のおかげなの」
「……なあ、ことみ」
「なに？　朋也君」
「今度の日曜、どこかに行かないか？」
前のデートはことみに誘われた。今度は俺が誘う番だ。
「……どこかって？」
頭は良いのに、こういう時のことみは妙に察しが悪かった。
「――早い話が、デートだよ。デート」
「デート（ｄａｔｅ）。逢引。もしくはランデヴーと言うの。恋愛関係にある二人が、一定時間外出を共にする事を言うの」
「そうだよ。そのデートだ」
「……誰が？」
「ことみと」
「誰と？」
「俺と」

ことみはカーっと顔を赤くする。
「……とっても、とっても嬉しいの」
「日曜、待ち合わせは商店街でいいよな」
「うん。とっても、とっても楽しみなの」

「良い身分よねー」
休み時間中、教室にいると唐突に杏が顔を出した。ぐったりとした視線だが、どこかこちらを責めているような表情だった。
「――何の用だ？　杏」
「――別に。受験期のこの時期に、日曜日にデートなんてできるのはあんた達だけよ。なんて思ってないわよ」
「待て。誰からそれを聞いた？」
大よそ、情報の出所はわかるのだが、訊かざるを得なかった。
「ことみに決まってるじゃない」
俺は頭を悩ませる。よりにもよって一番知られたくない人物に知られてしまった。
「うきうき（死語）して話してくれたわよ。『朋也君からデートに誘われたの。とっても、とっても嬉しいの』って」
次からはことみに口止めする事にしよう。
「しっかし本当に良い身分よね。皆受験勉強で必死だっていうのに、あんた達ときたら」
進学校である、この高校では、受験期の今頃、そんなことをしている暇はない。授業を免除されている天才少女と、受験を諦めている不良生徒だからこそできる事だった。
「ことみは良いとして、あんたはどうするの？　進路、まだ決まってないんでしょ」
「……ああ」
普通は三年に上がる前に、進学組か就職組に分かれる。進学校であるこの高校ではほぼ全員が進学組だ。俺と春原みたいな不良生徒のことを、学校側は考えてはいない。

「――なぁ」
「なに？」
「ことみはどうするんだ？」
以前、ことみは海外留学の話があった。全国の優秀な生徒を集め、海外の優秀な大学に留学させるという話。ことみも当然のようにその候補に選ばれていた。ことみは頭が良かった。天才と言っても良い。研究者である両親の血を、意志を継いでいるからでもある。俺何かとは違う、もっと高みに行ける奴だ。正直、俺なんかとは釣り合いが取れない。
とりあえずはその話は、保留という事になっていたはずだ。
「ことみの事だから進学だと思うけど――」
杏はにたりと笑う。
「さあねー。ことみのことだから、あんたに合わせて、『私、朋也君とずっと一緒にいる』とか言って、進学やめかねないわね」
俺には俺の人生があるように、ことみにはことみの人生がある。もしかしたら、俺がことみと一緒にいる事で、ことみの成長を妨げているのかもしれない。あいつの能力は、こんなところで埋もれさせていいわけがないし。あいつにも目的があるはずだ。亡くなった両親のことを尊敬しているだろうし、両親の意志を引き継ぐ気もあるはず。だけど、俺がいることで、あいつは意志を曲げるのかもしれない。

「あっ、朋也君」
待ち合わせの場所にいつもの如く俺は遅刻して現れた。走ってきたので肩で息をしている。別にそれで遅刻が許されるわけではないが。
「……悪い、ことみ。待ったか？」
「ううん。そんなことないの」
ことみは首を横に振った。
「……何分待った？」
「ほんの一時間三十分なの」

「ほんのっていうレベルかそれ。っていうか、待ち合わせは一時のはずだぞ」
今はきっかり一時半のはずだ。だから、遅刻をした時間はせいぜい三十分のはずだった。
「朋也君から誘って貰えて、とってもとっても嬉しかったの。それで私、つい、早く家を出てしまったの」
ことみは明後日の方を向いて、手をもじもじとさせている。それだけ楽しみにしていてくれたのだろう。
「……そうか。だったら楽しまないとな。それで、ことみはどこに行きたい？」
「……朋也君と一緒ならどこでもいいの。でも、せっかく朋也君と行くんだから」
ことみは向き直り、
「学校の図書室がいいの」
ズサッ、という崩れ落ちるような音が聞こえた。俺ではない。念のため。
振り返るが、特に何も見当たらなかった。近くには身を隠せるような喫茶店がある。
と、同時に、紙飛行機のようなものが飛んでくる。俺はそれを掴んで広げた。
『もっとちゃんとエスコートしなさいよ。バカ』と、書いてある。
誰だか知らないが（というより知らない振りをしたい）が、親切な行いであった。
「ことみ。図書室はいつも行っているだろ」
「けど――」
「今日は別のとこに行って見ないか？　動物園でも、水族館でもいい。映画館でもいいから」
「朋也君と行けるならどこでもいいの」
ことみは嬉しそうに微笑んだ。

「シロナガスクジラは鯨偶蹄目ナガスクジラ科ナガスクジラ属に属するクジラの１種なの。
現存する最大の動物種なの。かつては地球上に存在したあらゆる動物の中で最大の種で、記録によれば、体長３４メートルのものまで確認されているの。長須とは長身の意味で、水面に浮かび上がる際に水上からは白く見えることからこの和名があるの。英語では腹側に付着した珪藻によって黄色味を帯びて見えることから”ｓｕｌｐｈｕｒ　ｂｏｔｔｏｍ”（硫黄色の腹の意）とも呼ばれるの」（ウィキペディアから引用）
「わかった。ことみ、もういい」
結局、俺達は水族館に来た。
ことみは嬉々として蘊蓄を垂れる。いや、嬉々としているから蘊蓄を垂れるのだろう。
嬉々として水槽の中の魚達を眺めることみは、さながら童心に返っているかのようだった。知識としては知っていても、実物に接する機会はあまりなかったのだろう。何もが新鮮に映っているのだろう。

「……この世界は、私の知らない事だらけなの」
ことみは唐突にそう呟く。
「どれだけご本を読んでも、知らない事はなくならないの」
世界には数え切れないだけの本があり、その数え切れない本を数え切れないほど読んできたことみ、でも、知らない事の方が多い。
「――私をこの世界に連れ出してきてくれたのは、朋也君なの。あの時、私が家に閉じこもっていた時も、手を引いて外の世界へ連れ出して行ってくれた。狭い世界の中では、わからなかった事も、広い、外の世界に出ればわかるようになったこともあるの。これも、全ては朋也君のおかげなの。本当に本当にありがとうなの」
と、お辞儀をすることみ。
「――そんなことはない、ことみ。俺は何もしていない。結局は、

お前が、お前自身の力で得たものだ。俺はただその手助けをしただけだ。それに、感謝しているのはむしろ俺の方だ」
　あの子供の頃にことみと出会わなければ、今の俺もまたなかった。母親が死んで、親父に育てられるようになってから、碌なことがなかった。そうした中で、俺はことみとであった。あの家に紛れ込み、ことみの手を引き、外の世界に連れ出した。俺とことみは、誰よりも早く出会っていた。
「――ことみ、お前に会えて本当に良かった」
「……朋也君」
お互いの視線が合わさった。その場のムードに流されてか、手を腰に回し、顔をぐっと近づいてくる。
そして、お互いの唇が交わろうとした瞬間。
突如として高速で移動する物体がそれをさえぎる。
それは辞書のようだった。
「――あっ」
その辞書を投げた本人は、しまった、とばかりに気まずい顔をする。
「あっ、杏ちゃん」
「……偶然ね。ことみ」
杏は態度を取り繕うが、どう取り繕うが見苦しい言い訳に過ぎなかった。
「それに椋ちゃんと渚ちゃんも、こんにちは」
「……見つかってしまいました」
ばつが悪そうに椋。
「こんにちは。ことみちゃん」
笑顔で渚。
「どうしたんだよお前達。……もしかしてつけてきたのか？」
「違うわよ。たまたま、偶然じゃない。あんたがいきなりことみに手を出さないか心配だったってわけじゃないから」
「興味本位でもないです」
と、渚。

「……そうお姉ちゃんに言われていました」
……まあ、大よそこいつ等の魂胆はわかった。

「……それでね、椋ちゃん」
結局杏と椋、そして渚の三人は、同行する事になる。二人きりのデートは台無しになったのだが、何よりもことみが楽しそうで何よりだった。
「ほら。朋也、早くあれ取りなさいよ」
杏は目の前にあるクレーンゲームを指す。目の前には女の子向けのデフォルメされたカエルのぬいぐるみがあった。
「……なんで俺が」
「ことみの彼氏でしょ。彼氏として、彼女の前で良い格好してみようとか思わないの？」
「……ったく。仕方ないな」
結局、たった一つのぬいぐるみを取る為に俺は、今日のデート費用として持ってきたほぼ全財産を失う事になる。
まあ、ことみが「ありがとう。朋也君、ずっと大切にするの」と言ってくれたので、良しとするか。

「……ばいばーい。岡崎さん、ことみちゃん」
と、手を振って渚。
「また、学校で会いましょう」
と、椋。
俺はことみを送っていく事にした。三人とは商店街の入り口でお別れだった。もう夕暮れ時で、家に帰る頃には既に夜になっている。
杏は命令するように指を立て、
「……良い、朋也、送り狼にならないでよね」
ならねーよ。
「狼？」
ことみは首を傾げる。

「そう、男はいつ狼になるかわからない、危険な存在なんだから」
ことみは怯えたような顔で、
「朋也君、狼なの？」
「違うから、安心しろ。ことみ」

「今日は、とっても、とっても楽しかったの」
帰り際に、満足げにことみは言っていた。
「そうか……良かったな」
「朋也君と一緒にいると、楽しい事がたくさん、たくさんやってくるの」
そして、ことみの家に着いた。俺が手入れをした庭が見える。ことみの両親が居た、整理された頃の状態を保っている。ただ、しばらくすれば、あの状態は保てない。
「……また、草むしりしないとな」
俺は呟いた。
あの時、ことみが引き箒もっていた時、俺はあれくらいしか出来なかった。
「朋也君、今日は本当に本当にありがとうなの。私、本当に楽しかったの」
玄関先でことみは、礼儀正しくお辞儀をする。
「俺も楽しかったよ。ことみ」
『じゃあ、また明日』そう言って俺は踵を返そうとする。
「あっ、待って、朋也君」
ことみは俺を呼び止めた。向き直ろうとした時、唐突に、唇に感触が走る。
しばらくして、ことみは唇を離した。
「……朋也君、また明日」
翌日学校に行った時、妙な噂話を聞いた。廊下を歩いていた女生徒

達とすれ違った時、
『三年の一之瀬さん留学するんでしょ』
『あの人頭良いみたいだから、海外の有名大学に行くみたい。日本の大学じゃ釣り合わないみたい』

「……で、何であたしのとこに来るわけ？　ことみに聞けばいいじゃない」
と、杏。
ことみには、何となく聞き辛かった。それに、ことみは周囲の期待とか、自分の価値というものを客観的に把握しているとは思えない。何かにつけて、俺を優先してしまいそうで、聞くのは憚られた。留学の話は、保留になっただけで、ことみが留学しないと決まったわけではなかった。
杏は溜息を吐いた後、答える。
「……ことみに留学の話が来ているのは本当のこと。周りの先生は相当ことみに期待しているみたい。我が校からそういった生徒が出るのは相当名誉な事だって。ただ、あの子はそんな事は意にも介してないみたい。留学は愚か、進学する気もないかもしれない」
ことみほど頭が良くて進学しない、なんてのはありえない。ことみなら、どこへだって行ける。何だって出来る。あいつは、俺とは違う。俺なんかとは違う。
「……多分、あんたが居るからよ。あんたがここに居るから、ことみはここに残りたがってる。この町に、残りたいと思ってる」
「……それでことみはいいのか？　あいつは、両親の意志を引き継ぐんじゃないのか。何の為に今まで、それだけ多くのことを学んできたんだよ。あいつは俺とは違う。何だって出来る。俺何かにはできない、高みへ行ける。俺みたいな不良に構ってる暇なんて、あいつはないんだ。それがあいつの幸せじゃないのか。」
「……あんた、本当にそう思ってるの」
「ああ」

「ばっかじゃない。あんたことみの事全然わかってない。あんたと居る時、ことみはすっごく幸せそうだったじゃない。あんたがことみを幸せにしてあげるんじゃなかったの。あんた達はその程度の関係だったっての」
俺がこの町にいれば、ことみは、この町に残るのかもしれない。もっと高いところへ羽ばたいていける翼を持ちながら。

「一之瀬さんの留学の話？」
俺は職員室に来ていた。ことみの担任の先生は女の先生だった。
「……ああ。あなたは確か一ノ瀬さんの恋人だったわね。だったら、知る権利はあるかもしれないわね。ただ、ある程度の範囲よ。プライバシーに関わる範囲はダメ」
予めそう言われた。
「ことみは、ことみは留学するんですか？」
俺は単刀直入に聞いた。
「……それは本人次第ね。ただ、周囲がそう決め付けてしまっている節があるの。あなた達も三年生になって、もう受験期になろうとしているじゃない。そうした中で、早急に進路を決めなきゃいけない。この高校だったら、三年に上がる前に、理系文系、さらには特進クラスなどに分かれるわ。だけど、一ノ瀬さんは、日本の大学に納まるような器じゃない。だから、海外の大学で、より高い教育を受けるだろうと予測されているの」
「……ことみは、ことみはどうするんですか？」
「私にはわからないわ。ただ、一ノ瀬さんは、日本に残る事を選ぶでしょうね。皆と一緒に勉強したいと言っているけど、本当のところは、あなたと居たいからじゃないかしら？」
……俺と。
「ただ、日本で出来る教育は限られているわ。本気で学問を目指し、一之瀬さんのご両親のような研究者になりたいのなら、日本にいるメリットはあまりないの。岡崎さん、あなたは進路をどのように考

えているの？」
教師はそう、聞いた。
「……俺は」
漠然としか、俺は将来について考えていなかった。これからのこと、自分のこと、自分の進む道。何も。情けなくなってくる話だ。ことみが持ち合わせているような、能力も、周りからの期待も、希望も、俺には何もなかった。ただ、このまま惰性の毎日が続いていくのだろうという、灰色の未来が予測できるだけだった。
「……日本の大学に行くにせよ、海外の大学に行くにせよ。彼女はこの場所を離れていく事になるわ。だったら、より専門的な学問を学べる海外に行った方が、彼女の益になる。ただ、彼女はその判断を覆してしまいそうなの。あなたが、この町にいるというだけで」
「……そんな言い方」
「私は一ノ瀬さんの事を考えているだけです。あなたもわかっているでしょう。何が一之瀬さんにとってプラスになるのか。彼女の幸せになるのか」
教師の話は「結局は一ノ瀬さん次第ね」という言葉で、その話は打ち切られた。

時は流れていく。周りが進路を決め始め、その中で、俺は何も決められないままでいる。
雨模様の放課後だった。クラスには誰もいない。皆部活に行ったか、予備校や学習塾に行っているのだろう。俺だけ取り残された気分だった。俺はぼうっと、窓際から校庭を見下ろしていた。
「よっ。岡崎。何だか久しぶりだな。こんなところで何やってんの？」
春原の馬鹿が教室に入っていた。相変わらず能天気そうだ。
「……なんだ。春原か」
「どうしたの？　珍しく落ち込んでるじゃん」
「……別に。何でもねぇよ」

俺はまたそっぽを向いた。
「ラグビー部の奴等は熱心だねー。この雨の中でもカッパ着てランニングしてるよ。どうりであんな筋肉がつくわけだ」
春原も同じように、窓際から校庭を見下ろす。
「僕もサッカー部にいたら、毎日あんなことをしていたんだろうね」
春原は何とも言えない表情をした。
「……後悔しているのか？」
「まさか。あんな部抜けられてせーせーしてるよ。ただ、ない物ねだりなんだよ。何かを得る為に何かを失う。どちらも得る事はできない。多分、それだけのことだよ」
俺はバスケを失い、自堕落は日々を得た。その中で、俺はことみや、大勢の友達を得た。
そういう事だろう。だったらことみは、俺と付き合う事でまた、何か重大なものを失っているのではないか。
「春原、お前進路どうするんだ？」
「……今更受験ってわけにもいかないからね。地元に就職するよ」
春原はあっさりと答えた。
「岡崎、お前はどうするんだ？」
「俺は――」
俺は思い悩んだ。
「どちらにせよ、僕とお前で馬鹿騒ぎしていられるのも、もう少しの間さ」
――残っている時間は限られていて、俺は自分の道を決めなければならなかった。

下校している時の事だった。目の前には、電柱に張り付くようにつけてある一台の車があった。地面には修理用具と思しきいくつもの器具が置いてある。一人の男が、電柱の修理を行っていた。俺は以前、この一人の修理工と会った事があった。
「……芳野さん」

「どうした少年。随分と思い悩んでいるじゃないか」
芳野さんはいつもと同じように、ヘルメットを深く被るような、キザなポーズを取った。
「何でも話してみればいい。話せばすっきりするものだし、何か解決策が見えてくるかもしれない」

「なるほどな」
俺は芳野さんに悩みを相談した。ことみの事、自分の進路のこと。思い悩むことはいくらでもあったし、芳野さんには、なんというか、何でも話せるような、そんな雰囲気があった。
「もうすぐ卒業の時期になり、皆それぞれの道を進むだろう。俺がそうであったように。それは望まれるものではないかもしれない。だが、人はそれぞれの道を歩みだす。道は一本道のこともあれば、いくつにもわかれている事もある。平淡な道もあれば、いばらも道もあるだろう。皆、それぞれ違う、歩きだす道というものがある。岡崎、お前とその子の進む道も、また違うものだろう。例え夫婦だとしても、全く同じ人生を歩む事はできない。途中で別れることもある。生涯付き添うことなどできない。二人の進む道は違い、また距離が離れる事もあるかもしれない。だが、距離も時間も、二人の関係に穴をあけることはできない。二人の間に、真実の愛があれば」
そしてまた、ポーズを決める芳野さん。
「……結局は二人で決める事だ。お互いはお互いの幸せを求め、行き違う事もあるかもしれない。だがそれも、愛があるからこそ、起こるものだ。それを忘れるなよ、岡崎」
「ありがとうございます。芳野さん」
「……ところで岡崎、今俺は人手を欲している。相談料といっては何だが、手伝ってはくれないか。何、ちゃんと給料は出す」
相談料にかこつけて、俺は芳野さんの手伝いをすることになった。しかも、割と定期的に。そうした中で、俺は、働くという事の意味を感じつつあった。

時は過ぎる。秋になる。受験シーズンもいよいよ本格的になってきた。俺は俺で、けじめをつけなければならなくなってくる。

「おや。君はあの時の――」
道端で、老紳士に会った。ことみの両親の知り合いで、スーツケースを届けに来てくれた人だ。ことみに「悪者」扱いされ、ぞんざいな扱いを受けてきたが。話してみれば、立派な紳士であった。
「――お久しぶりです」
俺は会釈をする。
「どうかな。ことみ君とは元気にやっているかな」
「おかげさまで。ことみは元気にやっています」
「立ち話も何だ。そこの喫茶店にでも入ろう。コーヒー代くらいこちらが持つよ」

「……聞きたい事？」
老紳士は首をかしげた。
「ことみに、留学の話があるんです。あいつは、もしかしたら俺を理由にその話を断るかもしれない」
「……その話はことみ君から？」
「いえ。ただ、俺がそう思っているだけです」
「聞きたい話というのは、ことみ君の留学の話かね？」
「そうです」
「君はことみ君の留学に賛成かい？　反対かい？」
「わかりません。ただ、ことみが望むなら、俺は反対しません」
「良い答えだ。だけど、君自身が思う、本当のところはどうなのかね。留学となると、何年かは会えないかもしれない。研究者というのは往往にして多忙なものだ。もし、ことみ君が両親のような研究者を目指し、留学するというのは、そういう事になる。それに大して、君はどう思うのかな？」

「……ことみに会えなくなるのは、正直寂しい。だけど、俺が枷になって、ことみの夢が叶えられないのは嫌なんです。俺がことみの夢を奪うのは嫌なんです。俺がことみを狭い世界に閉じ込めることになるんじゃないか、って。昔俺はことみの手を引いて外に連れて行ったことがあるんです。ことみは狭い世界から、世界が広がったと言っていました。もし、俺がいることで、ことみの世界を狭めているんだとしたら、俺は俺を許せない」

「……良い答えだ。君は、本当にことみ君のことをよく思っているんだね。ことみ君は君のような恋人が持てて幸せだろう。多分、天国で彼女のご両親も、微笑んでいるだろうね」

老紳士は唐突に、一枚の封筒を渡した。分厚い封筒だった。

「……今日、私がここに来たのは他でもない。これを渡すためなんだ」

「なんですか、これは？」

「一ノ瀬夫妻の論文。正確にはその一部だ。研究所にあったバッグアップなどから、一部的に再現できたものをまとめたもの。失われた情報は大きく、完璧ではない。これを私はことみ君に手渡そうと思っていた。ことみ君がこれを読んだらどうなるか、わかるね？」

……もし、ことみがこれを読んだら。

「もし、これをことみ君が読んだら、彼女は強く関心を引かれるだろう。ご両親から強い知的好奇心を受け継いでいる子だ。さらには、この研究は人類の進歩にも繋がる。崇高な理念も、彼女は引き継いでいるのだよ。恐らく、彼女はこの論文を読んだら」

「――留学を決意する、ですか？」

紳士は正解、とばかりに深く頷く。

「日本で出来る教育は少ない。ましてや若い学生が研究など出来るものではない。だが、海外は違う。海外は年齢に対する差別感が薄く、飛び級など珍しくはない。彼女なら、難しくはないだろう。より早く、彼女の望むステージへ行けるかもしれない」

「……」

「この論文は君に託そう。私は何よりも、ことみ君の幸せを願っているのだからね。君が、ことみ君がより幸せになれる選択肢を選べば良い。辛い選択になるとは思うが、君なら出来ると思っているよ」
そう言い残し、老紳士は、論文を置いていった。

「朋也君――」
図書館に入ると、いつもと変わらないことみがそこに居た。
「どうしたの。朋也君。目にくまが出来てるの」
夕べは考え事が過ぎて、一睡も出来なかった。
「……なんでもない。ことみ」
話を切り出すタイミングが難しかった。

「――それでねー。朋也君」
ことみと一緒に帰宅していく事になる。
「……ああ」
ことみの話に、俺はただ相槌を打っているだけだった。
「今日の朋也君、なんだかおかしいの」

「……ことみ。少しあがっていっていいか？」
玄関先で、俺はそう聞いた。
「うん。いいけど、朋也君」

ことみの家は思ったより片付いた。両親の記事をスクラップにして、鋏で切り取っていたあの頃は、散々とした様子だったが。それが解消された今は、綺麗な一軒屋となっている。
手入れをされていなかった庭も、当時の状態に戻っている。今のこの家は、ことみとであった時と大して変わらない。ヴァイオリンを片手に持った少女の。当時から酷い音を出していたなと思い、苦笑する。

「……なあ、ことみ。ヴァイオリン弾いてみてくれないか？」
「……え？　どうしたの朋也君、頭打ったの？」
「どうしてそうなる」
俺はずっこけそうになる。
「いつも私がヴァイオリンを弾こうとすると、どうしてかわからないけど、朋也君は嫌がるの」
「たまにはお前のヴァイオリンを聴きたくなる事もある。これは別におかしなことでもないだろ」
「うん。朋也君がそういうなら、ことみ頑張るの」
ことみはどこからかヴァイオリンを取り出し、弾き始める。
相変わらず、酷い音だった。出会った時から、これだけは進歩しなかった。だけど、変わらないことが何よりもいとおしくなる事も、時としてあるはずだ。
俺達は庭に出た。
「……ここで会ったんだよな。俺達」
「そう、ここで朋也君に会ったの」
庭は俺達が出会った時と同じく、整理されていた。
「俺がここに紛れ込んで、そこにお前がいて――」
「そして朋也君が、私の手を引いて、外の世界に連れ出していってくれたの。狭い世界の中で、いくらご本を読んでいてもわからない事だらけなの。広い世界に出て初めて、ことみは、より多くのことを学んだの」
……ことみと出会ったのが、つい昨日のことのように思い出される。
「――なあ、ことみ」
唐突にことみに向き直る。
「その、ひとつだけ聞きたいんだが」
「……なあに、朋也君」
「……お前は、俺のことをどう思ってる」
「ことみは、朋也君の事が、とってもとっても大好き。そして、何

よりも大切な人。パパと、ママと同じくらい大切な人」
「……もし、お前が俺と離れなければいけないとしたら。時間や、距離が離れても、その気持ちは変わらないでいてくれるか？」
「……朋也君？」
ことみは、きょとんとした表情をした。
「答えてくれことみ！」
「私が、朋也君の事が好きだという気持ちは、何があっても変わらないの。絶対に。絶対に変わらないの」
その言葉を聞いて、俺は安心した。
「ことみ。お前に渡したいものがある」
俺は、一冊の封筒を渡す。老紳士から貰ったものだ。
「これは？」
「お前の両親の論文、その断片らしい。俺が読んでも正直意味がわからなかったが、お前なら意味がわかるはずだ。そして、ことみ――」
俺は切り出した。
「お前は留学しろ」
「……留学？」
「そうだ。日本じゃない。外国の大学に行って勉強するんだ」
「どうして？　そんなことしたら、朋也君に会えなくなるのに……」
「その論文を読んだら、多分、お前の留学に対する興味は増す。そして、一度留学したら、もしかしたら日本に帰ってくることはないかもしれない。帰ってくるにしても、その両親の研究を完成させてからになるかもしれない。だけど、それでも俺は、俺が重荷になって、お前の本当にやりたい事を奪う事なんて出来ないんだ」
「……朋也君」
「ことみ、俺はお前が好きだ。誰よりも好きだ。俺のお前に対する気持ちも、お前の俺に対する気持ちのように決して変わらない。だから、お前も俺を信じろ。この気持ちが変わらない事を信じろ。そうすれば、もう一度俺達は必ず出会う」

ことみは黙り込んだ。
「それを読んで、一晩ゆっくり考えてみてくれ。ひとつだけ言っておくけど、俺を一切合財の言い訳にするな。ことみ、お前が考えて、お前が決めろ。全てはお前が決めるべき道なんだ」
俺は俺の道があった。せめて、ことみに顔向けが出来るように、俺の道を精一杯生きよう。俺の人生を精一杯生きよう。他人に認められなくたっていい。ちっぽけな人生を、精一杯生きよう。そして、いつか俺は、ことみを迎えるんだ。
「やだ。朋也君、やだ。私朋也君と居たい。ずっと一緒にいたい」
ことみは涙ぐんでいる。しがみついてくる。その表情はまるで子供のようだった。ことみはまだ、大人になりきれないのかもしれない。両親に幼くして先立たれ、両親を強く求め続けてきた。だけど、いつまでも子供のままではいられない。子供はいつか、必ず大人になる。

『ことみへ。
世界は美しい。
悲しみと涙に満ちてさえ。
瞳を開きなさい。
やりたい事をしなさい。
なりたい者になりなさい。
友達を見つけなさい。
焦らずにゆっくりと大人になりなさい』

ことみの両親のメッセージを俺は思い出していた。
俺の言葉はことみを大人になれと急かしているのかもしれない。
「俺だって本当は悲しいんだ。なんでだよ。どうして俺とことみが離れ離れにならなきゃなんだよ。俺だって本当はずっとことみと一緒に居たいんだ。ずっと傍に居て欲しいんだ。だけど、ここでお前を引き止めたら、多分、俺は一生後悔する事になる。俺が、俺自身

がことみの歯止めとなって、世界を著しく狭めてしまうんだ。お前を広い世界に連れ出したはずの俺が、今度は狭い世界に引きとどめようとするんだ。そんなことをしたら、俺は俺自身を許せない」
「朋也君」
「……ことみ」
俺もいつの間にか涙を流していた。ことみと同じように、涙を。
俺とことみは見詰め合った。お互い、涙に濡れた瞳で。
そして、ある一定の時間を置いて、堰を切ったように俺達は、熱い口付けを交わした。今までになりくらい、熱く、激しいキスを。

結局、ことみは留学を決意した。『両親のような立派な研究者になりたい。そして、両親の研究を引き継ぎ、完成させたい』ことみはそう言っていた。それはことみの本心から出た言葉だろう。ただ、こちらに残りたい意志がなかったわけではないようだ。飛行機で見送る時、杏や椋、そして渚、その他多くのメンバーが見送りに来た。花束が贈られた時、ことみは大泣きしていた。それに釣られるように、その場に居た皆は号泣し始めた。

「……朋也君、私、朋也君のことぜったい、ぜったい忘れないから。離れて、遠くにいても、どれだけの時間が経っても、私は絶対に朋也君のことを忘れない」
飛行機に乗る間際に、ことみは俺にそう言った。
「ああ。俺も、ことみのこと、絶対に忘れない」
「浮気しちゃダメよ。朋也」
後ろから杏の声。
ことみは怒ったような顔で、
「朋也君、いくら相手が杏ちゃんでも、浮気したら絶対許さないの」
「って、何で浮気相手があたしになってるのよ。あたしは別に朋也のことなんて、その、何とも思ってないんだから」
「そうそう、杏には僕がいるしさ」

と、突如現れた春原。
「あんただけは絶対にない！」
「どげふっ！」
肘鉄をくらい、春原は地に伏した。そのやり取りを見て、周囲は爆笑に包まれた。別れの雰囲気には相応しくないが、それでも、俺達には似合っていた。
「……ことみ、研究を完成させるの、楽しみに待っているからな」
「うん。待っていて朋也君。絶対に私は、朋也君のところに、帰ってくるの」
その言葉を最後に、ことみを乗せた飛行機は飛び立っていった。ことみは一足早く、飛び立った。もうすぐ、卒業式だった。皆とも、別れる時がやってくる。みんな、着々と進路を決めている。俺は俺で、就職することになった。芳野さんに拾われて、芳野さんの仕事場に厄介になることになった。俺は俺の人生を、精一杯生きていよう。
いつ、ことみが帰って来ても良いように。

エピローグ。

――数年後。

「岡崎、この資料を持って来てくれ。グズグズするなよ」
「はい！」
俺は芳野さんの職場で働いていた。何年も働けば、要領はわかってくる。だけど、わからない事の方が多い。きっと、人が一生のうちに得られるものなんて僅かなものだ。世界は広く、知識は無数にある。それを知る為に人は生きているんだろう。
職場では色々なことがあった。色々な出会いもあった。俺も多少なり年を食った。同年代で身を固めている人も少なくない。芳野さんも、その一人だ。俺も上司から縁談があったり、色々あったが、

全て断っている。
一時でも、俺はことみの事を忘れた事はなかった。
ことみの噂は俺も聞いている。よく電話はかかってくる、というのもあるが、それがなくても、テレビや新聞で、ことみの活躍はよく耳にする。
今や、一ノ瀬ことみのことを知らない奴の方が少ないくらいだ。
そして、何より大きなニュースが飛び込んできた。ついにことみが、両親の失われた研究を打ちたて、完成させたのだ。そのニュースを俺は誰より先に、ことみ本人から聞いた。どんな報道機関よりも先にだ。近々、ニュースの一面はことみの研究で独占されるだろう。
そして――何よりも大きなニュースは。
「朋也君」
「……おかえり、ことみ」
「ただいま」
――ことみは昔と変わらない、満面の笑みを浮かべた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7835m/

ことみアフター

2010年12月6日13時55分発行